

■ こういう人間観の表現もあるのか——うまい。

悟の人間観によれば、人間にはふた通り、あるそうだ。人間は誰でも弱みや恥や虚栄、嘘をもっている。それをごまかす奴、ごまかそうと腐心する奴は「嘘つき」で、それのない奴、もしくはあっても屁とも思わぬ奴は「ろくでなし」である。では、謙虚にそれを見とめ、ごまかしもせずすんで告白して人の指弾や裁きを受けようとする奴は何や、とわたしが口を入れると、
「そいつは〈ひとでなし〉や」

■ 男が寄ってくる、寄って来ない、か…。

私にいわせると、どうしても男をつかまえない女があり、また、すぐ男友達をつくることのできる女があるのだった。そして前者はますますやっきになればなるほど男から遠ざかり、後者の女は、人生を楽しめば楽しむほど、男たちが寄ってくるのだった。

■ 女心とは、このようなものだろうか…。

私の手をにぎって、
「ほんまはなあ、どこの女より、わしは、あんたが一ばん好きやねんで」
というのであった。
その言葉こそ、私が天から聞きたい一言なのであった。私を愛している、というだけでは不足なのであった。
どの女よりも一番、というのが上につかなければいけないのであった。

■ こんな「男の仕事」もあったのか…。

「とにかく、手ごわい女を手に入れようと思たら、まず、恥の外聞のと、いうておられまへんな。とにかく、厚かまシイにいく。面の皮、千枚張りもええとこ。ヌケヌケとほめまくってやった。顔合せるたんびにほめる」
「何をほめるの？」
「何をとって、女は何をほめられたいですか？ひそか女が自慢してるものを見抜くのは男の仕事ですよ。それが見抜けん男には、女をくどく資格おまへんよ」

■ 「自分はやったんだから、今度はあなたも……」というのは、よくあるパターンだが。

努力しない人は、生れつき、努力する才能に恵まれていないのだから、どんなに周囲で努力するようお膳立てしてやっても、しないのである。
自分が努力したから、人も努力するべきだ、と強いるのは、このへんのところがよくのみこめてないからである。

■ 難しいハイ・ミス立場

ハイ・ミスというもの、心弱くてはかなわぬものである。じつに生き難い。
あんまりお人よしだと若い子になめられるし、キツとしてると欲求不満だ、ヒステリーだとうるさい。愛想よくすると色キチガイといわれ、男ざらいを押し出すと、もてないから、と同情される。
つまり、私たちハイ・ミスは何かあると、あれだから売れ残るのだといわれ、売れ残るからああなるのだといわれる。イタチゴッコである。どっちへ廻ってもたすからない。